

## 戦争の「最初の犠牲者」

### ― 第一次世界大戦時のドイツ軍の残虐行為に関するイギリスのプロパガンダ ―

高 橋 章 夫

#### はじめに

「手を切り落とされた子どもを、磔にされたカナダ人を、死体工場を覚えているか?」という見出しの記事が、1939年9月8日、とあるアメリカの地方紙に掲載された。そこには、「今のところ残虐行為の話はまだ伝わっていないが」そのうちに伝わって来ると書かれており、イギリスのプロパガンダに警戒するよう呼びかけ、「戦争が始まるとき、真実が最初の犠牲者になる」という、イギリス労働党議員アーサー・ボンソンビーからの引用で記事を締めくくっている。<sup>1</sup>この記事が掲載される一週間前、ナチス・ドイツはポーランドに侵攻し、25年前にベルギーで行ったこととは比較にならない規模の残虐行為を行った。そしてドイツ情報省は、ポーランド兵によって妻を銃剣で突き刺された男の証言や、性器や、指や鼻を切り落とされた男を見たという証言などを掲載した、ドイツ系ポーランド人に対する残虐行為の報告書を出版した。<sup>2</sup>その冒頭には、この報告書は「入隊を促し、同盟国の共感を呼ぶために第一次大戦中に創作された悪名高い『ブライス・レポート』のような意図的なでっち上げ」ではないと記されている。<sup>3</sup>

1914年のドイツによるベルギー侵略、さらにはそこでの残虐行為は、当初はイギリス参戦の正当性を保障するものであった。だが、開戦時のドイツ首相、テオバルト・フォン・ベートマン＝ホルヴェークが戦後に主張したように、4年間の戦争を通して各国が被った損害と比較するとベルギーの中立侵害など問題ではなくなった。<sup>4</sup>そして遂にはベルギーにおける残虐行為は虚偽のプロパガンダの象徴と化した。それはまた、戦時中の虚偽のプロパガンダを暴くという英米の反戦主義者の試みがドイツのプロパガンダに吸収されていく過程でもあった。

## 『ブライス・レポート』

イギリスにとっては単なる中立国の一つに過ぎないベルギーよりも、同盟国であるフランスが侵略された方が遙かに大きな問題であるのだが、当初からフランスよりもベルギーの侵略が重視された。ベルギーの方が被害の規模が大きかったことが第一の要因であろうが、それに加えベルギーから 25 万人というかつてない規模の難民を受け容れていたイギリスにとっては、ベルギー侵略の方がより身近に感じられる問題であり、より容易に情報を得ることができた。また単に同盟国が侵略されたことを戦争の大義とするのでは、その正当性は相対的なものに過ぎない。それよりも「ドイツ軍の残虐行為に苦しむ無力な小国ベルギーを救う」という絶対的正義を標榜する方が説得力を持ち、中立を保っていたイタリアやアメリカに参戦を促す上でも効果的であるためベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為が強調されたのであろう。

ドイツ軍による残虐行為が広く行われたのは 8 月 18 日以降であり、初期の段階ではベルギーの中立侵犯という条約違反に焦点を当てることでイギリスは自国の参戦を正当化していた。とりわけベートマン＝ホルヴェークの、ベルギーの中立を保障する 1839 年のロンドン条約は「紙切れ一枚に過ぎない」という発言が盛んに取り上げられ非難の対象となった。<sup>5</sup> オックスフォード大学近代史学部の手による『われわれが戦う理由』（1914）は、この戦争は、国際的な契約を、それが邪魔になると「紙切れ一枚」と看做す「国家理性」を主張する側と、「そのような契約を維持することは重要であり、避けることのできない義務」と看做す「法による支配」を主張する側との間の戦いであると論じ、ジェイムズ・ヨクスオールは「ドイツは『公明正大に振る舞う』ことを、正々堂々戦うことを、『紙切れ一枚』を尊重することを教え込まれなくてはならない」と言う。<sup>6</sup> このような契約の遵守という法の観点からドイツを非難する言説は、道徳的観点からドイツを批判するものへと徐々に推移していった。

イギリスの新聞紙上で報道された残虐行為は、「母親のスカートにしがみついている赤ん坊の両手をドイツ兵が切り落としたのをこの目で見た」という男の話や、ドイツ兵たちが 16 歳くらいの少女に無理やり酒を飲まし、「家の前で順番に強姦（rape）した」という話、さらには「1 人の女性を 7 人のドイツ兵が続けざまに凌

辱（violate）し、その後その女性を殺害した」というものであった。<sup>7</sup> 無抵抗な民間人に残虐な行為を働くドイツ兵というイメージを形成するために女性や子どもが犠牲になった事例が繰り返し強調されたのだが、女性の強姦を描写する際に用いられた“violate”や“rape”という表現は、「ベルギーの中立は侵害された（has been violated）」や、ドイツは「ベルギーの不可侵の中立を侵害した（violated）」という記述、さらには、「ベルギーの略奪」（“The Rape of Belgium”）という見出しに見られるように、ドイツが中立国ベルギーに対して行った行為を記述する際にも頻繁に用いられた。<sup>8</sup> つまり残虐行為とは、「ドイツ国家／ドイツ兵」による「ベルギー国家／ベルギー人女性」に対する rape や violation という二つの意味を持つことになる。そしてイギリスの参戦は、「小国ベルギーを救うイギリス」／「無力な女性を救う男性」という二重構造を軸に正当化されたのである。

ドイツ軍の残虐行為というプロパガンダの核を成したものが1915年5月に出版された『ブライス・レポート』（正式名称は『ドイツ軍による残虐行為疑惑調査委員会の報告』）である。<sup>9</sup> その内容は前述の新聞紙上を賑わしたセンセーショナルな記事と同じであり特に目新しいところはなく、供述者の氏名も記載されていないにも拘わらず、この報告書は残虐行為の動かぬ証拠となった。調査委員会の委員長を務めたジェイムズ・ブライスは、ドイツのハイデルベルク大学で学んだ経験があり、ボーア戦争においてはイギリスの立場に反対していた法律家・政治家・歴史家であった。1905年から1907年まで在米イギリス大使の地位に就いており、特にアメリカでの名声が高く、この報告書はそれまでドイツ軍の残虐行為に対して懐疑的であったアメリカの世論を動かす一因となった。<sup>10</sup> つまり公的機関による権威付けとブライスという名前の持つ影響力が相まって、噂と事実、そして虚偽が癒着し、その総体が「真実」として受け止められたのである。

ジョン・ホーンとアラン・クレイマーは、『1914年のドイツ軍の残虐行為』（2001）においてベルギーでは開戦からの5ヶ月間で5,521人の民間人が殺害されたと推計しており、その数は1915年11月の時点でベルギー政府広報局が発表した6,000人という数に近いものである。さらにホーンらは、『ブライス・レポート』は、全体としては死者数と破壊された建物の数を過小評価しているとさえ述べている。<sup>11</sup> 普仏戦争時にドイツ軍は、フランスのゲリラ兵（francs-tireurs）に苦しめら

れており、1914年のドイツ兵たちは、父親から当時の経験を、そして上官からはこの大戦で再び同様のことが起こる可能性を伝えられており、戦前の軍事訓練もゲリラ兵からの攻撃を想定したものであったため、ドイツ兵はゲリラ兵によって攻撃されるという先入観を植え付けられた。さらにはそもそものスケジュールに無理のあったシュリーフェン・プランを計画通り実行できなかった原因として、つまりは理想と現実の溝を埋めるものとして民間人によるゲリラ活動がスケープゴートにされた。その結果、ドイツ兵たちは、味方や敵軍からの発砲や砲撃を民間人からのゲリラ攻撃と決めつけ、同士討ちをし、建物に放火し、民間人を人質にし、集団処刑し、さらには行軍時に民間人を盾として利用した。証拠はないものの、ベルギー民間人がドイツ兵に対し散発的に発砲した可能性はあるが、占領による平穏が訪れる以前の混乱状態の中でドイツ側が主張しているような組織立ったゲリラ活動を行うことは不可能であった。<sup>12</sup>つまり1914年のドイツ軍は、第一次大戦ではなく、過去の普仏戦争を戦っていたのである。

しかしながら問題となるのは残虐行為の規模ではなくその内容であろう。戦時中は残虐行為の象徴に、そして戦後はイギリスの虚偽のプロパガンダの象徴になった子ども手足の切断と、民間人女性の強姦は実際に行われたのであろうか。『ブライス・レポート』の問題点として、証言者が匿名であることがしばしば指摘されてきたが、ロンドンの帝国戦争博物館には当時のイギリス内務省の機密文章が保管されており、そこには証言者の氏名が記載され、その多くが署名入りの1,000件以上の残虐行為の証言がまとめられている。法廷弁護士によって聞き取りの行われたベルギー難民による証言の中では手足の切断に関しては22件が報告されているが、現場を目撃したというものは僅かに2件に過ぎず、手足を切断された死体を目撃したというものが17件である。<sup>13</sup>イギリス兵士による証言の中では、死体を目撃したという者は一人もおらず、間接的に聞いたというものが3件と、手足を切断された人を見たというものが3件あるのみに過ぎない。<sup>14</sup>子どもの手足が切断されたという証言は絶対数が少ない上、その多くは又聞きである。さらには手足の欠損は砲撃によって生じ得るものである。故にドイツ兵が意図的に手足の切断を行った可能性は極めて低く、仮にそのような行為が行われていたとしても例外的な事例と考えていいであろう。

次にドイツ兵による民間人女性の強姦について検証していく。手足の切断の証言とは異なり、内務省の機密文書の中には強姦に関する証言は豊富にあり、被害者の親族から聞いた話も数多くある。<sup>15</sup> そのため強姦に関してはその証言に誇張や虚偽もあるだろうが、実際にも広く行われていたと考えていいように思える。ではなぜ戦後、強姦という犯罪が軽視、若しくは否定されるに至ったのだろうか。フランス、パ＝ド＝カレー県でドイツ兵に強姦されたある女性は、市長に対してこの件を公にしないよう懇願し、ムルト＝エ＝モゼル県で強姦された別の女性は、警察に対し、「恐怖と恥辱」のため、ドイツ当局に対し告訴をしなかったと言い、ベルギーにおいては、被害者の家族によって隠蔽されていたとベルギーの調査委員会は判断している。<sup>16</sup> ジェフ・リプキスは、20世紀初頭の女性にとって、「強姦」(rape)は今日よりも重大な屈辱であり、「陵辱」(violation)という婉曲表現が蔓延し、ドイツ兵が「汚した」(violate)ものは、想像を超えるほどの神聖なものであったので、被害者は証言することを躊躇ったと言う。そしてたとえ可視化することが不可能であっても、ドイツ兵による強姦は「殺人、放火、略奪とほぼ同じくらい蔓延していた」と論じている。<sup>17</sup> そして4年間に渡る戦争の被害と比較すると、ベルギー中立の「侵害」(violation)が取るに足らぬものとされたのと同様に、女性の「陵辱」(violation)もまた些細なこととして忘れ去れることになったのである。

スーザン・ブラウンミラーは、「最も非難するのが容易であり、最も証明するのが困難である犯罪は同時に、昔から最も反証するのが容易な犯罪でもあった。論理的な専門家にとって、強姦の記述が虚偽であると証明することは馬鹿馬鹿しいほど容易であった」とベルギー女性に対する強姦という犯罪を軽視しがちな歴史学者を批判している。<sup>18</sup> 『ブライス・レポート』を初めとするベルギー民間人に対する残虐行為のプロパガンダでは、女性や子どもの手足を切断するという単なる噂に過ぎないと思われるショッキングな残虐行為に加え、表面化する可能性が低く、それ故確たる証拠は乏しいものの、人々の怒りを最もかき立てる女性の強姦という犯罪が強調されたため、戦時中はドイツを非難するプロパガンダとして大きな効果を発揮し、戦後はその論証の困難さのため、この報告書全体が、延いては残虐行為の存在自体が神話と看做され否定されることとなった。<sup>19</sup>

## 『白書』とルシタニア号

『ブライス・レポート』が出版された数日後、ドイツ政府もまた、連合国のプロパガンダに対抗する報告書、『ベルギーのドイツ軍』を出版した。連合国の間では『白書』と呼ばれていたこの報告書でなされている主張は、多くのベルギー民間人は、男性のみならず女性や子どももまた非合法のゲリラ活動に従事しており、ドイツ軍はそれに対する反撃、若しくは交戦法規に基づいた処刑を行っただけであるというものだ。そしてベルギー民間人が「ドイツ軍に対して非合法的な行いをした責任は、主にベルギー政府にあることは疑いの余地が無い」と断じている。<sup>20</sup>『白書』には、ベルギー人女性が負傷兵の性器を切り取り彼の口に押し込んだというものや、両手両足を切断されたドイツ兵の死体を発見したというもの、8歳から10歳くらいのベルギーの少女たちが負傷したドイツ兵の耳を切り取っていたという証言、さらには「あらゆる年齢の男と共に、おびただしい数の女が、10歳の少女ですら発砲してきた」という供述などが掲載されている。<sup>21</sup>連合国の間では被害者の象徴であったベルギー女性や子どもは、サディスティックに男性を苦しめる加害者に転化されており、『白書』は『ブライス・レポート』におけるベルギー民間人とドイツ兵を単に入れ替えたような内容であり、『ブライス・レポート』と同様、その信憑性は疑わしい。結局、第二次世界大戦後、『白書』の元となったと思われる資料が発見され、ドイツにとって都合が悪い証言は排除され、掲載された証言も改竄されたものであることが明らかになった。<sup>22</sup>

興味深いことにドイツ政府は『白書』において、ベルギー民間人に対し残虐な行いをしたことは否定しているものの、民間人の殺害は否定していない。恐らくそれは、単にドイツ軍によって行われたとされる残虐行為を否定するよりも、ベルギー民間人の残虐性を前面に押し出す方が効果的であると思われたからであろう。1918年、アメリカ人経済学者ウォルター・ワイルは、「文明化も組織化も完了していない部族集団に対する戦争と […] 長い歴史を持ち高度に組織化されたベルギーやフランスのような国民国家を打ち倒し占領しようとすることは別次元の問題である」とドイツを非難する。<sup>23</sup>そもそもベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為の象徴である、子どもの手を切り落とすという行為はかつてベルギー国王レオポルド2世統治下のコンゴ自由国で行われていたことである。当時からそのような「残

虐行為」は批判され、大戦中はベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為を非難する者に対する反論として度々言及された。<sup>24</sup> だがアメリカにとっては、「文明国」への残虐行為は自衛の問題にもなりうるため、同じ残虐行為であっても、その対象が「部族集団」の場合と、「国民国家」である場合とでは大きな違いがある。それ故ドイツは、「ドイツ軍によるベルギー民間人に対する残虐行為」を「ベルギー民間人によるドイツ軍に対する残虐行為」に置き換えることによって、無力な中立国であるベルギーを一方的に蹂躪したというイメージの払拭を狙い、ベルギーへの侵略そのものを、文明国に対して残虐行為を働くベルギー人からの自衛として正当化しようと試みたのであろう。

だが『白書』とは異なり、イギリスやアメリカにおいては、『ブライス・レポート』は出版されるよりも前に、その信憑性は保証されていたようなものであった。この報告書が発表された1915年5月は、イギリス国民の反ドイツ感情は最高潮に達した月であり、イギリス各地でドイツ人やオーストリア人の経営する商店が襲われ、20世紀のイギリスで最大規模の暴動が起こった。それは排他的ナショナリズムへと発展し、スカンジナビア人や、ロシア人、ユダヤ人、さらには中国人までもが暴徒の標的となった。<sup>25</sup> 1915年に入るとドイツ軍は、1月にツェッペリンによる空襲を開始し、4月末にイープルにおいて毒ガスを使用し、5月7日にはドイツの潜水艦、U-20がイギリスの客船ルシタニア号を撃沈した。『ブライス・レポート』が公表されたのは、その直後の5月12日のことである。この3つの出来事で犠牲となったのは、ベルギー人ではなくイギリス人であり、ドイツ軍の残虐性に対する脅威、そして怒りをより身近に感じさせるものであった。とりわけ数多くの民間人が犠牲となったルシタニア号事件は、ドイツ軍の残虐性を訴える上で大きな役割を果たした。この事件について『タイムズ』紙は次のように報じている。

ルシタニア号での死者数は1,400人以上〔実際は1,198人〕に上り、罪もない犠牲者全員が不当に殺害されたのだ。この行為は愕然とさせるものだ。なぜならそれは無慈悲で容赦のないものであり、そして恐らくそれ以上に、全く無意味な行いであるからだ。この行為はこの上ない強烈な怒りを喚起するものだ。なぜならそれにより、ドイツ人全員が文明社会の枠の外にいることを示す、無

差別な残虐行為というおぞましいドイツの政策が、疑いを持っていた者や無関心であった者に対しても、ついに明らかになったからだ。<sup>26</sup>

ドイツ軍が残虐行為を行う際、そこに合理的理由はそもそも存在せず、それ故、残虐行為の存在を、それがドイツ軍にとって「無意味」であるからという理由で否定することはできないとする。ルシタニア号に乗船していた 129 人の子どものうち 94 人が「罪もない犠牲者」となった今、たとえそれが子どもの手首を切り落としたり、幼児を銃剣に突き刺したりするような無意味で野蛮な行為であっても、信じるに足る証言になり得た。<sup>27</sup> さらには自国の民間人が犠牲となることで、ベルギー人に対する残虐行為をイギリス人に対する残虐行為と読み替えることを可能にした。このような時期に『ブライス・レポート』が出版されたことがこの報告書の信憑性を高める上で大きな役割を果たした。

ベルギー民間人の処刑に対するドイツ政府の見解は、ルシタニア号の撃沈に対するものと同じ理論に基づいている。ルシタニア号の乗客の大多数はイギリス人であったが、128 人のアメリカ人も犠牲となった。アメリカ政府から抗議を受けたドイツ政府は、ルシタニア号は偽装した大砲を装備しており、さらに「勇敢なドイツ兵を殺すことになる、カナダ兵と 5,400 箱の弾薬を含む軍需品を積んで」いたため、「ドイツ兵の生命を守るための正当な自己防衛として」撃沈したと反論した。<sup>28</sup> つまりドイツにとっては、民間人の殺害も商船の撃沈も自己防衛のためなのである。それは現に攻撃している敵に対する反撃のみならず、将来攻撃してくる可能性がある要因を取り除くことも含む。このようなドイツ政府の態度を、5 月 15 日の『デイリー・ヘラルド』紙は、「ドイツ政府はルシタニア号が弾薬を積載していたと主張している。それが事実か否か、さらにもしそれが事実であるならば、国際法に従ってルシタニア号を沈めることを『正当化』できるか否かなど、われわれにはわからないし関心も無い。それを肯定できる判例や典拠があろうがなかろうが、殺人は殺人なのだ」と非難した。またロンドンに住んでいた民間人女性、ジョージアナ・リーは、ルシタニア号事件の翌日の日記に次のように記している。

先週ニューヨークの新聞紙上でアメリカ人に対し、イングランドにルシタニア



号で渡航する者は、その危険を承知したうえで乗船するようにとの警告が掲載された。影響力のある多くのアメリカ人は [……]、乗船しないよう警告する謎めいた電報を受け取った。ドイツ人が、女性や子どもが乗っている船を沈めるなどと真剣に信じる人は誰もいなかったなのでその警告は無視された。<sup>29</sup>

このような警告を2月の段階からアメリカ国民に対して行ってきたとドイツ政府は反論したのだが、問題はそこではない。<sup>30</sup> 警告に従わなかった民間人を警告通りに殺害するという行為は、ドイツに対する恐怖心と怒りを煽ることにはなっても、その正当性を証明することにはならなかった。ドイツが非難されたのはベルギーとフランスにはゲリラ兵がいるという理由で、ルシタニア号が武装し兵員や弾薬を輸送しているという理由で、関係のない民間人の命を奪ったことに対してである。たとえ自衛や合法的な措置であっても、民間人を殺害することを厭わないというドイツの方針そのものが、当時のイギリス、そしてアメリカでは残虐行為と看做されたのである。

### 民間人の処刑

ドイツ占領下のブリュッセルで看護師をしていたイギリス人女性、イーディス・キャベルは、連合国の兵士を密かに中立国のオランダへ逃がしていた。1915年8月に逮捕された彼女は、同年10月12日に銃殺刑に処された。連合国、そして中立国からも激しく非難されたことに対し、ドイツ外務省事務次官、アルフレート・ツインマーマンは、次のような公式見解を発表した。「軍の安全性を標的とする犯罪が、女性によって犯された犯罪であるという理由で罰せられることがなければ、その国で、とりわけ戦時中の国で何が起こるか考えてみて下さい。世界中のどのような刑法も、中でも戦時法は、男女を区別していません。[……] 男性も女性も法の下では平等なのです。出される判決とその後の措置は、犯した罪の程度によってのみ変わるのです。」<sup>31</sup> 軍の保安という立場から処刑を正当化し、軍部に危害を加える者は相手が誰であれ厳罰に処するというドイツの一貫した方針を表明している。それに対しハミルトン・カフは、「彼女が何らかの刑罰に処せられるべきであるという点については言い争うことはできませんし、そのつもりもありません [……]」。

これは、法的には死刑が宣告されうる罪かも知れません。しかしたとえそのような判決が下されたとしても、それは、ドイツ以外のどの国においても、一人の女性に対して決して執行されることのない刑なのです」と貴族院で述べている。<sup>32</sup> カフは、ルシタニア号事件に関する『デイリー・ヘラルド』紙の見解と同じく、たとえ法的に問題がなくとも道徳的に問題があるとしてドイツを非難している。

さらに1916年7月には、非武装商船ブリュッセル号の船長であったチャールズ・フライアットが処刑された。フライアットは、前年の3月、ドイツ潜水艦U-33の攻撃に遭った際、体当たりによって反撃したが失敗に終わり捕らえられていた。ドイツ政府の見解は以下の通りである。「彼はゲリラ兵（franc-tireur）と看做され銃殺されたのである。陸戦法規が、違反者は死刑になると威嚇することで兵士を暗殺から保護しているように、この法は海軍の兵士を海上での暗殺から保護しているものである。海上でのゲリラ兵から自国の潜水艦乗員を守るために、ドイツは今後もこの交戦法規を用いる所存である。」<sup>33</sup> フライアットがU-33に攻撃を加えた1915年3月はUボートによる無警告攻撃が行われていた時期である。ドイツ政府の警告文には、「全ての敵商船は、その乗員、乗客が危険を避けることができぬまま破壊されることもあり得る」とある。<sup>34</sup> これによってイギリス商船に搭乗している民間人は、いわば軍艦に搭乗する兵士と同様に扱われることになった。だがフライアットの処刑に関するドイツ政府の見解と突き合わせると、ドイツ兵は敵民間人に対し奇襲攻撃をする可能性があるが、奇襲攻撃を受けた民間人は、ドイツ兵の身の安全を守るという観点から反撃することは許されていないとし、仮に反撃して捕まった場合は処刑されるということになる。奇襲を受けた兵士ならば反撃することは当然であり、敵に捕まった場合は捕虜になることを考慮すると、フライアットが受けた判決は不条理なものである。これは民間人に対する軍部の優越というドイツの構造自体を浮き彫りにする見解であり、その正当性を主張することによって、逆にイギリスのプロパガンダに加担する結果となった。

アドルフ・ヒトラーは第一次世界大戦を連合国のプロパガンダの勝利と看做し、特にイギリスのプロパガンダを絶賛する一方で、ドイツのプロパガンダには一貫性が欠如しているとし、その未熟さを糾弾した。<sup>35</sup> 開戦当初から徴兵制度を布いていたドイツに対し、開戦から一年半の間、志願兵制度を維持していたイギリスは、志

願兵を募るためには専らプロパガンダに頼る必要があり、敵に対する憎悪と危機感を自国民に植え付ける能力では一日の長があった。さらにドイツのプロパガンダは、汎スラブ主義の、そして何よりもツァーリズムの打倒を戦争の大義としていた。<sup>36</sup> 敵をドイツ一国に絞ってプロパガンダを展開したイギリスに対して東西を敵に回したドイツは、東向きプロパガンダに重点を置いたためイギリスに背を向ける形となり、イギリスのプロパガンダに対して常に後手に回る結果となった。そしてイギリスが「カイザーからベルギーを解放する」ことを戦争目的にしたのに対し、「ツァーリから民衆を解放する」というドイツの掲げた戦争目的は、最終的には「カイザーから自国民を解放する」というドイツ革命に行き着くことになった。

しかしながら、ある意味ではドイツのプロパガンダも一貫性を持っていた。イギリスのプロパガンダが成功した最大の理由は、プロパガンダそのものの質がドイツのものより優れていたからというよりも寧ろ、ドイツが、ベルギー民間人の処刑、ツェッペリンによる空爆、中立国の商船に対する無警告攻撃という行為を、民間人の殺害というプロパガンダに利用されるリスクの高い行為を、一貫して繰り返し、一貫してそれを正当化しようとしたことにあった。キャベルとフライアットという2人の「民間」人に対し、「軍」の法規に従って処刑するという行為に関しては、ドイツ政府の公式見解をそのまま英米の国民に伝えるだけで激しい反ドイツ感情を引き起こすに足るプロパガンダになり得たのである。ドイツは、民間人の殺害を繰り返し、その都度それが合法であるとして正当性を訴えるのだが、軍法、つまりは軍の価値観に沿って民間人を殺害することによって喚起される恐怖や怒りを理解することのできないドイツの軍国主義そのものが非難の対象となった。

イギリスは、自国の商船に中立国の旗を揚げさせることで中立国と自国との間にある境界線を、さらには商船に偽装した囃船を使用することによって民間人と兵士との間にある境界線を隠蔽したわけであるから、「罪もない」民間人の被害を拡大させた責任はイギリスにもある。また、ルシタニア号のような商船で弾薬を輸送するのは、搭乗する民間人を人質に取り軍事行動をしていると看做すことができ、進軍する際にベルギー民間人を盾に用いたドイツ軍の行為との間に本質的な差はない。ドイツの犯した過ちはイギリスが盾にした「罪もない」民間人を殺害したこと

である。<sup>37</sup> そのような行為はプロパガンダに容易に利用できるものであった。勿論、イギリスの行った海上封鎖もまた、ドイツ民間人の生活に深刻な損害を与えた残虐行為である。だがそれは長期的、間接的なものであり、鮮烈な印象を与えるものではなく、敵の残虐性を誇張するプロパガンダに発展させることは困難であった。そして何よりもドイツのプロパガンダは、軍に刃向かう民間人は処刑されて当然という価値観に基づいたものであり、異なる価値観を持つ人々に対して効果的なプロパガンダを発信することができなかった。ヒトラーは、イギリスのプロパガンダは「最も単純な概念を何千回も繰り返すことによって」成功したと言う。<sup>38</sup> だがそうではなく、何千回も繰り返すに足る材料を、合法であれ非合法であれ兵士による民間人の殺害という行為を、大戦を通してドイツが繰り返し続けたことがイギリス側のプロパガンダの信憑性を高め、それこそが戦時中の両国のプロパガンダの成否を決定づけることになったのである。

### 犠牲者像の変遷

当初はベルギー民間人が残虐行為の犠牲者と捉えられていたのだが、ルシタニア号事件やキャベルとフライアットの処刑を通して、イギリスでは自国の民間人が犠牲者と認識されるようになった。さらに西部戦線での戦死者が増加していくに従って、前線で戦った兵士こそが戦争という残虐行為の最大の犠牲者であるという認識が生れた。ロバート・グレイヴズは、「人をあざ笑うかのようなドイツによるベルギーの中立侵害の話を読み、私は憤慨した。残虐行為の記述のうち、20% ほどは戦時下における誇張かもしれないと考えていたのだが、実際のところはもちろん、20% どころではなかった」と振り返り、「ベルギー人と直に接したわれわれは、もはやベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為の記事を信じなかった」と言う。また彼は、妻のもとを離れ過酷な環境に置かれた兵士たちには女性が必要なため両陣営には売春宿があり、「ドイツ側の前線の方が連合国の側より強姦が多いという話を信じていなかった」と言い、さらにはそのような売春宿で女性が「強制的に働かされていた」(forcible enlistment) という話は信じられず、「自発的な制度 (voluntary system) があってどこが悪いのだ」と「私たち」は皮肉を込めて言っていたと記している。<sup>39</sup> ここで彼の言う「私たち」とは前線の兵士たちであり、女たちが売春宿

で働くことを男たちが兵役に就くことに喩え、売春宿で働くことは塹壕で働くことに比較すると安全な仕事であり大した問題ではないと揶揄している。

だが妻から離れて暮らす兵士が女性を必要としていた以上に、夫や父親から引き離され、仕事もない環境で暮らす女性には生活の糧が必要であった。ベルギーのゲントを占領していたドイツ軍の一員であったハインリヒ・ヴァントは、ゲントにはドイツ兵が驚くほど「大勢の女性や少女の売春婦」がいたが、「飢え死にしたいのであれば他に選択肢がないだけである」と彼女たちを擁護し、「兵士たちの苦痛は大きく、恐ろしいものである。だが女性や少女たちの精神的苦痛の方がさらに大きく、より恐ろしいものであり、そして占領地域で極貧状態にある女性の苦痛が最も大きく最も恐ろしいものだ。この戦争で自分の命ではなく名誉を捧げなくてはならなかった殉教者がいたのだ！」と彼女らを憐れむ。<sup>40</sup> グレイヴズに限らず、多くの帰還兵は、残虐行為のプロパガンダに対して否定的な見方をしているのだが、1914年にドイツが侵略した地域の大半は休戦時まで占領されたままであり、膠着した塹壕戦で兵士たちが頻繁に目にするのは、仲間の兵士が死んでいく姿、さらには仲間の、そして敵の兵士の死体であった。それは直接その現場を目撃したわけではない民間人に対するドイツ軍の残虐行為よりも遥かに大きな心的影響を与えた。兵士の犠牲者が増えていく中、民間人に対する同情心は徐々に薄れていき、非難されるべきは無人地帯の向こう側で同様の苦しみを味わったドイツ兵ではなく、兵士たちを戦場に追いやった偽りのプロパガンダに染まった銃後の民間人であるという見解が形成された。兵士たちが経験した戦場こそが最大の残虐行為が行われた場であり、残虐行為のプロパガンダは、たとえそこに事実が含まれていたとしても、彼らをそのような戦場に駆り立てた原因でもあり、非難の対象になり得た。イギリス軍のみで50万人、そして両軍合せて300万人以上の兵士が死亡した西部戦線と比較すると6千人という侵略時に殺されたベルギー及びフランス民間人の数は霞んで見え、兵士たちの払った犠牲の大きさに比べれば些細なことで考慮するに値しないと看做されるようになった。

1921年4月、ジョン・サイモンは『タイムズ』紙上で、アイルランド独立戦争の最中、イギリス人将校が殺害された報復として行われた放火や破壊活動に関して、「7年前、世界中の文明人がベルギーにおける〔ドイツ軍の報復行為〕を弾劾

したのに、どのようにしたらアイルランドでの行いを正当化できるのか」と、ロイド・ジョージ首相を厳しく非難した。<sup>41</sup> 戦時中は検閲のためにイギリスでは入手不可能であった『白書』の英訳版が出版されたのもまた4月のことであった。1921年6月4日の『ガーディアン』紙の社説は、『白書』に関して、「ベルギーでは羽目を外した軍隊による殺害や放火といった行為は殆ど行われてなかったようである。[……] 殆ど場合は念入りな裁判が行われ、宣誓に基づく証言が一定数ある場合にのみ死刑が執行されたようだ」と言い、さらに、アイルランドやインドでの行いを考慮すれば、イギリスにはドイツを非難する資格はないと断じている。また、『白書』を英訳した当人である E. N. ベネットは、『ブライス・レポート』とは異なり『白書』は信頼が置けるものであり、「世界中で最も厳格な規律を持ち、最も教養があるドイツ兵が、わざわざ意図的に罪もない民間人を撃ったとは信じ難い」と述べ、「文明世界は1914年のベルギーでなされたドイツ軍の報復行為を糾弾するよう求められた。ではその6年後、アイルランドにおけるイギリスの報復行為についてどのような裁断が下されるのであろうか」と問いかける。<sup>42</sup> ベネットが本心から『白書』の内容を信じていたか否かはわからないが、彼の目的は過去の戦争の残虐行為の是非を問う事ではなく、現にアイルランドで行われているイギリス軍による残虐行為を非難することであった。徴兵制を導入し、毒ガスを使用し、投降してきたドイツ兵やドイツ人捕虜を虐待し、休戦後も海上封鎖を続けることでドイツ民間人を苦しめ、さらにはアイルランドで「残虐行為」を行った今、イギリスのドイツに対する道徳的優位性は消滅しており、最早イギリスにドイツを非難する資格はないように思える。だがそれは論のすりかえに過ぎず、加害者同士が結託してお互いの罪を隠蔽することであり、イギリスにはドイツを赦す資格もないのではないだろうか。

だが、両国民ともにプロパガンダの犠牲者であると看做すことによって、ドイツを赦すという選択肢が浮上した。1924年10月10日、『ガーディアン』紙は、「ポーツマスのイギリス兵はドイツ人女性を裸にし、彼女たちの全身にタールを塗りむち打って通りを歩かせていた」というドイツのプロパガンダを紹介し、「われわれ皆に必要なものは、寛恕であり、他者を赦す寛大さであるということを認識することによって、真の平和へと至る道が見つかるのだ」と主張している。荒唐無稽な敵国

のプロパガンダを引き合いに出すことで、『ブライス・レポート』を初めとするイギリスのプロパガンダも虚偽であるとする。そして最大の犠牲を払った者は、虚偽のプロパガンダの中の民間人ではなく、プロパガンダに扇動された兵士であるという見解が形成されることとなった。

### 「アントワープの鐘」と「2人のドイツ人看護婦」

アメリカの歴史学者、H. C. ピーターソンは、『戦争のプロパガンダ』（1939）の中で、モンロー主義を貫いていたアメリカを戦争という残虐行為に巻き込んだのはイギリスのプロパガンダであるとし、『ブライス・レポート』に描かれている内容の多くは、残虐行為などではなく、『ブライス・レポート』でなされたプロパガンダ自体が、「最悪の残虐行為の一つ」と言う。<sup>43</sup> ポンソンビーもまた同様の見解を持っていた。彼が1928年に出版した『戦時の虚偽』は、大戦中の連合国の、とりわけイギリスのプロパガンダに対する評価を決定づける上で最も大きな影響を与えた。彼はこの著作の中で、政府やメディアによって巧妙に考案されたプロパガンダの虚偽を劇的に暴き、人々にその危険性を知らせようとした。『戦時の虚偽』の中で最も広く知られており、プロパガンダの典型例として今なお頻繁に引用される章がある。

#### 第28章「アントワープ陥落に関する記事の制作 1914年11月」

アントワープの陥落が知れ渡ると教会の鐘が鳴らされた（原文はドイツ語）。『ケルン新聞』

ケルン新聞によると、要塞が占拠された際、アントワープの聖職者は、教会の鐘を鳴らすことを強制させられた。『ル・マタン』紙

『ル・マタン』紙が得たケルンからの情報によると、アントワープが占拠された際、教会の鐘を鳴らすのを拒んだベルギー人司祭がその職を追われた。『タイムズ』紙

『タイムズ』紙が、パリ経由でケルンから得た情報によると、アントワープが占拠された際、教会の鐘を鳴らすのを拒んだ不運なベルギー人司祭は、重労働の刑を宣告された。『コリエーレ・デラ・セラ』紙

ケルンからロンドン経由で『コリエーレ・デラ・セラ』紙にもたらされた情報によると、野蛮なアントワープ征服者は、教会の鐘を鳴らすのを拒むという英雄的行動を取った不運なベルギー人司祭に対し、生きた舌<sup>ぜつ</sup>として鐘の中に逆さまに吊すという処罰を下した。『ル・マタン』紙

当時の『タイム』誌の書評にもこの箇所は引用され、「ヨーロッパの新聞が、何もないところから徐々に、そして自発的に残虐行為の物語を築き上げていく過程」を、「意見を差し挟むことなく」提示していると評している。<sup>45</sup> この章は、プロパガンダが拡散、誇張、そして再生産されていく過程を、滑稽にそして端的に伝えている。ロバート・グレイヴズは、1929年に出版した『さらば古きものよ』の中で、この箇所とほぼ同じ内容を「私が最近目にした、当時の新聞記事を時系列に並べた切り抜き」として引用しており、今度はこのグレイヴズの記述を出典として、ジェイ・ウィンターや、ポール・ファッセルといった歴史、文学の高名な専門家がこのプロパガンダ記事を引用しているとエイドリアン・グレゴリーは指摘している。<sup>46</sup> だがそれだけに留まらない。「歴史の目撃者シリーズ」の中の一冊には、「1914年10月のプロパガンダの拡散について」という注釈付きで『さらば古きものよ』の該当箇所が転載され、ハイネマンの歴史教科書には、グレイヴズと一字一句違わぬ記述が、新聞各紙からの「抜粋」として引用されている。<sup>47</sup> つまり「アントワープ陥落に関するニュースの制作」は、専門家のみならず一般の人々にとっても大戦中の連合国のプロパガンダの典型例として語り継がれている事例である。既に1941年にアメリカの歴史学者、ジェイムズ・モーガン・リードによって、そのような新聞記事は存在しないと指摘されているにも拘わらず。

1939年、今となってはこの記事の出典を突き止めることはできないとポンソンビーに言われたリードは、『ル・マタン』紙と『タイムズ』紙にはそのような記事が存在しないことを確認した一方で、この章と同じ内容が1915年7月4日の『北



『ドイツ新聞』紙上に、連合国のプロパガンダを嘲る風刺記事として掲載されていることを突き止めた。そして驚くべき事に、1916年4月22日、同じ『北ドイツ新聞』に、ポンソンビーを出典として再びこの記事が掲載されていたのである。ポンソンビーがこの箇所を最初に発表したのは1916年であり、その出典は間違いなく一度目の『北ドイツ新聞』の記事を翻訳したものであろう。<sup>48</sup>『戦時の虚偽』の中では、『ル・マタン』紙が「アントワープの鐘」に関する記事を二度報じ、二度目ではよりドイツの残虐性が誇張されている。だが現実には、この章全体を『北ドイツ新聞』が二度報じた。一度目は連合国側のプロパガンダを風刺する記事、つまりは意図的な虚偽として。そして二度目にはポンソンビーを出典とした「真実」、つまりは意図せぬ虚偽として。『戦時の虚偽』を読んだ者は、大戦中の連合国のプロパガンダを外から俯瞰しているかのような感覚に陥るが、その感覚こそがポンソンビーが、そして『北ドイツ新聞』が、恐らくは無意識のうちに「虚偽」を「真実」に変換し、再生産したプロパガンダなのである。

キャベルの処刑を巡る戦後の言説を時系列に並べると、「アントワープの鐘」に類似した展開が見られる。

イーデリス・キャベルが処刑されたのと似た罪でフランスにより二人のドイツ人看護婦が処刑されたことに対し、抗議をするよう促されたドイツ人たちは「何？抗議しろって？フランス人は彼女たちを銃殺する完全な権利を持っていたのだ！」と言った。[1930年]

キャベルの処刑は国際法に完全に従ったものである。そしてその後しばらくして、本質的には同じ状況下で、フランスは二人のドイツ人看護婦を銃殺したのだ。[1940年]

キャベルが処刑された数週間後、フランスの赤十字病院に勤務していた二人のドイツ人看護婦が、ドイツ兵捕虜を脱走させるのを手助けした嫌疑でフランスの軍法会議にかけられ有罪を宣告され、死刑判決を受けた。二人ともその後、銃殺隊により処刑された。この処刑はフランスやドイツ、ヨーロッパの中立国

の数紙で簡単に触れられただけであり、アメリカの新聞紙上では報告されなかったようである。[1974 年]<sup>49</sup>

「似た状況」が「本質的には同じ状況」になり、そして「フランスの赤十字病院に勤務していた二人のドイツ人看護婦が、ドイツ兵捕虜を脱走させるのを手助けした」と具体的状況が付加され、元々は漠然とした話であったものが、そこに詳細な状況を描写することによって信憑性が高められる。この3つの記述はどれも出典が記されておらず、犠牲となったドイツ人看護婦の名前すら明かされていない。さらに時代を遡ると、アメリカの政治学者、ハロルド・ラスウェルの『世界大戦中のプロパガンダ技術』（1927）の中に、これらの話の元となったと思われる記述がある。

一般幕僚でプロパガンダを担当していたプロシア人将校は、非常に誠実で良心的な紳士であった。しかしながら彼は、次の話を聞けばわかるように、この仕事には本当に向いていない人間だった。ベルリンにいたあるアメリカの新聞記者が彼と知り合いになった。連合国が看護婦キャベルの処刑を巡って大騒動を巻き起こした少し後に、フランスはキャベルと似たような状況にあった二人のドイツ人看護婦を処刑した。ドイツの新聞各紙は不満の声を漏らすことすらなかった。後にそのアメリカ人は、その将校にこう尋ねた。

「なぜアメリカでのイギリスのプロパガンダに反撃しないのですか？」

「なぜだ、どういう意味だ？」

「先日フランスが銃殺にした2人の看護婦のことで激怒してみせたらいいのですよ」

「何？抗議をしろと言うのか？フランス人は彼女たちを銃殺する完全な権利を持っていたのだ！」<sup>50</sup>

この記述から、誰であれ軍に危害を加える者は厳罰に処すべきであるというドイツの主張の一貫性と、都合の良い場合にのみ女性の処刑を残虐であると非難する

連合国のプロパガンダの偽善性を読み取ることができる。だがこのドイツ人将校とアメリカ人新聞記者の会話は余りにできすぎた話ではないだろうか。ポンソンビーが『戦時の虚偽』で引用している新聞記事の中で「アントワープの鐘」の章のみ日付が付されていなかったのと同様に、『大戦中のプロパガンダ技術』の中の他の引用箇所には脚注が付けられているのだが、この箇所については出典が記されていない。となると、ラスウェルはどこでこの話を知ったのであろうか。

戦後アメリカに移住したフランス人司祭、エルネスト・ディムネは、歴史学者ジェイムズ・トラスロウ・アダムズの著作で、「アメリカン・ドリーム」という表現が初めて用いられたことで知られている『アメリカの叙事詩』（1931）の中に、「ドイツ人が看護婦キャベルを処刑したのと殆ど同じ状況下で、フランス人は二人のドイツ人従軍看護婦を処刑したのだが、われわれにそのことが伝えられることはなかった」という一文を見つける。<sup>51</sup> 彼がその出典をアダムズに問い合わせると、アダムズは『世界大戦中のプロパガンダ技術』の記述を参考にしたと答えた。次に彼は、ラスウェルに出典を問い合わせたところ、その箇所はカール・フォン・ウィーガンドからの引用であり、ウィーガンドは、ニコライ大佐が情報源であると述べていたとラスウェルは答えた。<sup>52</sup> ウィーガンドはドイツからアメリカに移住したドイツと「親密な仲にある」記者であり、そのことをディムネから聞いたアダムズは、それ以降の版から該当箇所を削除したが、すでに大量に流通していたそれまでの版の影響力を消し去ることはできなかった。<sup>53</sup>

「アントワープの鐘」に関しては、近年、数人の歴史学者がその誤りを指摘しているのだが、ドイツ人看護婦の処刑に関しては、1938年の『神智学季刊誌』にディムネの著作中の該当箇所が転載されて以降、その真偽を問題とした著作は見当たらない。<sup>54</sup> ドイツ政府はキャベルを処刑したことによって諸外国から抗議された際、ドイツ人女性のシュミットとモスがフランス軍によってスパイ容疑で処刑されたことや、ボーア戦争時のイギリス軍の女性や子どもに対する残虐行為を引き合いに出して反論しており、最も効果的な反論になるドイツ人看護婦の処刑に限って無言を貫いたのは余りに不自然である。<sup>55</sup> だがその後もラスウェルからの、そして上述の情報源を明らかにしていない文献からの引用として、さらには出典を記すことなく、フランス当局が二人のドイツ人看護婦を銃殺刑にし、それをドイツ政府は容認

したという「隠された真実」は今日まで繰り返し再発見され続けている。<sup>56</sup>

忘れ去られた過去の研究を発掘することによって、『『キャベルと同様に処刑されたドイツ人看護婦が二人いた』という話はドイツ側の虚偽のプロパガンダの可能性が高い』、そして『『アントワープの鐘に関して連合国では偽りの新聞記事が掲載された』という物語自体が虚偽のプロパガンダである』という視点が得られる。だが果たしてこの高次の視点を得ることによって真実に近づくことができると言えるのだろうか。むしろカウンター・プロパガンダによって封殺されていた過去のプロパガンダを再び呼び起こし、それを正当化するために利用される危険性の方が大きいのではないだろうか。確かに誤った情報を排除するという点では有意義であろう。だがこれは僅か2つの事例について、それが虚偽である可能性を指摘しているに過ぎない。ベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為の話は、実際に「アントワープの鐘」のように連合国の間で広く報道され、誇張されていった。看護婦ではないにせよ、フランスがマタ・ハリを初めとしてスパイ嫌疑で数人の女性を処刑したことも事実である。

リップキスは、『リハーサル』（2007）において、1914年のベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為は普仏戦争時のゲリラ兵への恐怖のためドイツ兵がパニックに陥ったことが主な原因であるとするホーンらの主張は不自然であると反論し、普仏戦争は44年も昔のことで、それを直接経験したのは一部の高級将校のみであり、二つの戦争の状況も大きく異なっていると言う。彼は1914年にベルギー民間人を罪の有無を問わず大量に殺害したのは、テロ行為をも戦争の手段として容認していたドイツ軍の伝統的方针が原因であるとし、そのような意味においては、後年ナチス・ドイツによって行われた数々の犯罪行為の予行演習であったと論じ、ドイツ軍の罪をより厳しく追求している。彼はまた、この著作の巻頭の謝辞の中で次のように言う。

大学院生の時バイエルンで一夏を過ごしたのだが、両大戦の帰還兵を含む多くのアメリカ人が思ったのと同じように、私もまた、そこで出会った人々は、感じがよく、思いやりがあり、暖かい人々であると思った[……。]言うまでもないことだが、20世紀の前半に犯された罪に対して責任がある者は、今日生

きているドイツ人の中ではほんの一握りに過ぎず、そして第二次世界大戦後に生れた世代の中では誰もいない。残念ながら、「人種差別」であるという批判が見境無くなされるため、本来ならば言うまでもないことであっても、時として言う必要があるのだ。<sup>57</sup>

これと同様の記述は『ブライス・レポート』にも見られる。残虐行為疑惑調査委員会のメンバーであった H. A. L. フィッシャーは、ブライスの死後に彼の伝記を出版し、その中で当時のブライスは、「[ドイツに対し] たとえ無罪判決は出せなくとも、罪の責任を小範囲に絞ることを望んでいた」と語っている。<sup>58</sup> 確かにブライスは非難されるべきはプロシア主義であると主張しており、ドイツ人全体を野蛮人として糾弾しようという意図は見られない。例えばアールスコートの廃墟を見て「私も父親なのだ。こんなことは耐えられない。これは戦争じゃない。虐殺だ」というドイツ人将校の話や、ベルギー人女性を追い回していた酔ったドイツ兵が処刑されたという証言も掲載されており、さらには、「ドイツの農民は他のヨーロッパの人々と同様に親切で温厚である」とも記している。<sup>59</sup> しかしながら、ドイツ人の良い面を多少加えたところで、そこに掲載された数々の残虐行為を中和するには不十分であり、ドイツを全面的な悪と描かないことによって却ってこの報告書の中立的な観点が強調され、すでに醸成されつつあったドイツ人に対する、さらには国内の移民に対する差別意識を助長、肯定することに繋がった。もし『リハーサル』の中で検証されているドイツ軍の残虐行為が、1915年5月に発表されていたとしたら、『ブライス・レポート』と同様にプロパガンダとして十分な影響力を持ち、人種差別を助長することになったであろう。「言うまでもないこと」を予め言うことによって、そこに書かれている内容は先入観に左右されていないと強調することは、逆に人種差別を正当化する根拠とされる危険性があることを留意する必要がある。

リードは、「嘘をつくというのは意識的な欺瞞である。残虐行為に関するイギリスにおけるプロパガンダの多くは、誤った報告や印象に基づいてなされた無意識的な欺瞞である。[……] そして多くのプロパガンダは、自分の言っていることは正しいと真剣に信じている人たちによって広められたのだ」と総括している。<sup>60</sup> 『ブ

ライス・レポート』は、「意識的な欺瞞」というよりも寧ろ、既に前年から巷に流布している噂を再生産したに過ぎない。だが、「ジェイムズ・ブライス」と「イギリス政府」という名前を付すことによって単なる噂話を「真実」に変換した。さらにはツェッペリン、毒ガス、ルシタニア号を経て、多くの人々がドイツ軍の残虐性を既に信じており、未だに懐疑的な者や判断を保留している者を説得したいという、願望、そして義憤のため、大きな影響力を持つことになった。そして『戦時の虚偽』を初めとする、戦時中のプロパガンダを糾弾する目的で、両大戦間期に英米で出版された数多くの著作も同様に「無意識的な欺瞞」であって、「意識的な欺瞞」ではない。戦時中は顧みられることが殆どなかったプロパガンダの偽善性が徐々に明るみになると、プロパガンダを虚偽と看做す見解はそれが何であれ正しいものと無批判に受け止め、その見解を他者と共有しようとしたのである。

本章の冒頭で触れた、「宣戦布告がなされた時、最初に犠牲になるのが真実である」というポンソンビーの言葉は、『戦時の虚偽』の有名な巻頭の辞である。連合国のプロパガンダを糾弾し、「真実」を明るみにしようとするポンソンビーの試みは、結果的にヴェルサイユ講和条約の改正を目論む旧態依然とした保守的なドイツ外務省にとって都合のよい「真実」を作り出すことになった。戦時中のプロパガンダは、政府とメディアが主導して無から捏造したと看做している点において『戦時の虚偽』は誤っている。だがそれ以上に重大な欠点は、『白書』を初めとするドイツ側のプロパガンダ批判を殆ど行っておらず、さらにプロパガンダの元となった事実を無視している点である。ポンソンビーはベルギーにおける残虐行為について、「ルヴェンは消滅した」とドイツ軍による破壊活動を誇張して伝える新聞記事を引用し、「実際に被害を被ったのは町の8分の1である」と言うのみであり、ラリー・ザッカーマンが指摘しているように、事の発端であるドイツ軍による放火については全く触れていない。<sup>61</sup> ルヴェンを占領したドイツ軍は町の有力者を人質に取り、敵対行動を取ると人質を処刑すると住民に通達した。そしてベルギー軍からの攻撃を民間人によるゲリラ活動と勘違いして、248人の民間人を殺害し、この町にある8,928軒の住居のうち1,120軒を焼き払った。<sup>62</sup>

ルシタニア号事件に関しても同様である。ルシタニア号が弾薬を輸送していたというドイツの主張は、武装し兵員輸送をしていたという主張と「同様に誤りであ

る」という当時の『デイリー・エクスプレス』紙の記事に対してポンソンビーは、ルシタニア号は武装しておらず兵士の輸送もしていなかったというイギリス側の主張は、「弾薬を積載していたという事実を、最初は否定し、後に隠蔽しようとした事実がなかったとしたら」受け入れることができると反論する。<sup>63</sup> ルシタニア号は大砲を装備しておらずカナダ兵も乗船していなかったが、戦時禁輸品の弾薬を輸送していたのは事実であった。つまり戦時中のプロパガンダは、一部の事実を拡大し、虚偽までもが事実であるかのような印象を与えたのに対し、ポンソンビーは一部の虚偽を拡大し、事実までもが虚偽であるかのような印象を与えたのである。「手首を切り落とされた子ども」は虚偽のプロパガンダであると主張することが他の残虐行為を否定することにはならないのと同様に、「アントワープの鐘」と「2人のドイツ人看護婦」の話は虚偽のカウンター・プロパガンダであると主張することは、「手首を切り落とされた子ども」や、「ルシタニア号は弾薬輸送をしていなかった」という虚偽のプロパガンダの存在を否定することにはならない。

### おわりに

戦時中のイギリスのプロパガンダでは、残虐行為の犠牲者像はベルギー民間人から自国の民間人、そして兵士へと推移し、ベルギーに対する関心は徐々に薄れていった。一方ポンソンビーは「戦時中に嘘を用いて人の心に憎しみという毒を流し込むことの方が、実際の命の損失よりも大きな悪である」と戦時中の連合国のプロパガンダを糾弾し、「人の魂を汚すことは、人の肉体を破壊することよりも悪い」と言う。<sup>64</sup> プロパガンダとカウンター・プロパガンダの狭間で、現実には「最初の犠牲者」となり、「肉体を破壊」されたベルギー民間人の存在が忘れ去られることになった。

ポーランド侵攻の9日前、ヒトラーは将校たちに対する演説の中で、「もっともらしいものであろうがなかろうが、戦争を開始する理由になるプロパガンダを私が作ろう。真実を語っていたか否かを勝者は後に問われることはない。戦争を始める時、そして戦っている時は正義など重要ではない。勝つことが重要なのだ」と述べた。<sup>65</sup> ナチスが政権を握る以前から、ドイツ外務省はポンソンビーの『戦時の虚偽』を「残虐行為の嘘に対抗する最も効果的で最高の本」として、フランスとドイツで

の出版援助をし、第二次大戦中もドイツで版を重ねた。そしてヒトラーは第二次世界大戦時、占領下のブリュッセルで先の大戦でベルギー軍参謀がドイツ軍による残虐行為を捏造し、民間人にゲリラ活動を推奨していたという証拠を探させた。<sup>66</sup>つまりヒトラー自身も既にドイツのプロパガンダの影響下にあり、その延長線上に新たなプロパガンダを作りだしたのである。ポンソンビーにとっては、ヴェルサイユ講和条約によって無力化され、民主主義国になったと思われていたドイツが戦時中に行った残虐行為やプロパガンダを批判するよりも、同じ惨事を繰り返さぬために自国のプロパガンダの「真実」を広めることがより重要であった。そしてヒトラーは、その「真実」を、将来の戦争遂行に役立つ効果的な手段として利用したのである。

プロパガンダが最も大きな影響力を発揮するのは、敵対するプロパガンダが虚偽であると証明した時かもしれない。全てが偽りであることを証明する必要は無い。最も目を引くセンセーショナルな事例―そのような事例は往々にして虚偽であるのだが―を否定する証拠を突きつけることによって、他の事実に基づくプロパガンダすら虚偽であるかのような印象を与えることができる。敵対するプロパガンダの事実の部分には触れず、虚偽の部分のみを声高に批判することによって、その全てを覆すことすら可能である。それまで信じていた「真実」に代わる、新たな「真実」を獲得した人々は、義憤に燃え、「真実」の伝道者にならんとし、カウンター・プロパガンダを流布する。それ故一旦プロパガンダの影響下に置かれると、この二項対立から抜け出すことは容易ではない。戦争プロパガンダの最大の問題は、「真実」を求める人々に対し、このような二元的思考を強要することではないのだろうか。

#### ―謝辞―

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金「ジェンダーから見た第一次世界大戦の表象」（基盤研究（C）；課題番号 22510291；研究代表者 荒木映子）の助成を受けたものである。



—注—

- 1 *Florence Times* [Alabama], 8 September 1939.
- 2 *Polish Acts of Atrocity against the German Minority in Poland*, 2nd ed. (Berlin: Volk Und Reich Verlag, 1940), pp. 124, 141, 175.
- 3 *Polish Acts*, p. 9.
- 4 Theobald von Bethmann Hollweg, *Reflections on the World War*, part 1, trans., George Young (London: Thornton Butterworth, 1920), p. 159.
- 5 Ellery C. Stowell, *The Diplomacy of the War of 1914* (Boston: Houghton Mifflin, 1915), p. 455.
- 6 Ernest Barker, and H. W. Carless Davis, *Why We Are at War: Great Britain's Case*, 3rd ed. (Oxford: Clarendon, 1914), p. 108; Michael Paris, *Over the Top: The Great War and Juvenile Literature in Britain* (Westport, CT: Praeger, 2004) p. 1 に引用。
- 7 *Times*, 28 August 1914; *Ibid.*, 16 September 1914; *Daily Express*, 16 September 1914; *Ibid.*, 29 December 1914.
- 8 *Times*, 27 August 1914; *Daily Express*, 17 September 1914; *Times*, 16 January 1915.
- 9 *Report of the Committee on Alleged German Outrages* (London: HMSO, 1915)
- 10 ドイツ軍と行動を共にしていたアメリカ人記者が残虐行為を否定したということもあり、『ニューヨーク・タイムズ』紙の論調は、残虐行為に対して当初は懐疑的だったが、『ブライス・レポート』が出版されると、3 ページにわたってその抜粋を記述し、同日の社説で、この報告書こそが残虐行為の証拠になるとしている。また『マンチェスター・ガーディアン』（以下『ガーディアン』）紙には、ここアメリカで、この報告書が尊重されるには、「ブライスが委員長を務めていることを知るだけで十分であった」という特派員の記事が掲載されている。*New York Times* 13 May 1915; *Manchester Guardian* 14 May 1915.
- 11 John Horne and Alan Kramer, *German Atrocities 1914: A History of Denial* (New Haven: Yale UP, 2001), pp.74, 230, 233, 435-39.
- 12 Horne and Kramer, pp.9-139; Alan Kramer, *Dynamic of Destruction: Cultural and Mass Killing in the First World War* (2007; Oxford: Oxford UP, 2008), pp. 6-30.

- 13 Imperial War Museum(以下 IWM), London, misc 246, G.A. 264, 299(a)、及び G.A. 190 (a), 261, 269(d), 269(e), 269(f), 269(j), 208(b), 208(c), 210, 217(f), 299(b), 324, 326, 327, 329, 331, 376。
- 14 IWM, misc 246, G.A. 700(17, 22, 80)、及び G.A. 700(17, 37, 76)。但し G.A. 700(37)の犠牲者は、娘が強姦されるのを防ごうとして手を切り落とされた父親であり、G.A. 700(76)は、H. ローチ(Roach)二等兵による証言だが、彼は戦争神経症に罹っており、彼を聴取した将校はその証言を懐疑的に捉えている。
- 15 ベルギー人による証言は、IWM, misc 246, G.A. 74, 143, 154, 194(b), 208(d), 217(e), 217(g), 221, 237(b), 241, 257(a), 257(b), 287(a), 269(i), 269(j), 330, 333, 334, 335, 336, 337, 371, 382 があり、イギリス兵による証言では、GA 700 (17, 19, 21, 23, 26, 28, 34, 35, 37, 44, 52, 53(1), 53(2), 57, 58, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 67, 68, 71, 76, 78, 81(4), 82, 83, 84, 85, 88, 89, 91, 92, 99, 100, 101, 103, 106, 107(4))がある。このうち G.A. 700 (28)の被害者はベルギー人男性である。また G.A. 700 (58)は単に噂を聞いただけであるとして署名はされておらず、G.A. 700 (76)は、手足の切断に関する証言と同じく、神経症に罹った兵士によるものでありその信憑性は疑わしい。上記以外でも、若い女性が連れ去られたという話(G.A. 700 (54))や、或いは取り乱した女性が自分を指さし、「ドイツ人」“Allemands”と言う姿を見て、強姦されたと推測するといった不確実な証言(G.A. 700 (89))は多数ある。
- 16 Horne and Kramer, pp. 196-97.
- 17 Jeff Lipkes, *Rehearsals: the German Army in Belgium, August 1914* (Leuven: Leuven UP, 2007), pp. 162-65. 但しリプキスが扱っているのは、リージュやディナンといった残虐行為の被害が最も大きかった一部の地域のみであり、ベルギー全土にこのような残虐行為が「蔓延」していたわけではない。
- 18 Susan Brownmiller, *Against Our Will: Men, Women, and Rape* (1975; New York: Bantam 1976), p. 42.
- 19 この教訓を踏まえてか、前述のナチス・ドイツのプロパガンダでは、「強姦については殆ど知られていない。女性や少女は彼女たちがドイツ人であるという理由で強姦された。恥辱のため多くの女性は口をつぐんでおり、自殺をした女性もいた」と、強姦に関してはより慎重に扱うようになった。*Polish Acts*, p.86.

- 20 *The German Army in Belgium: The White Book of May 1915*, trans., E. N. Bennett (London: Swarthmore, 1921), pp. xvii, 176, 285.
- 21 *German Army*, pp. 64, 59-60, 153, 219.
- 22 Horne and Kramer, pp. 241-47; Lipkes, pp. 600-02; Larry Zuckerman, *The Rape of Belgium: The Untold Story of World War I* (New York: New York UP, 2004), p. 62.
- 23 Walter E. Weyl, *The End of the War* (New York: Macmillan, 1918), p. 79.
- 24 *Times*, 13 May 1897; *New York Times*, 3 January, 1902; *ibid.*, 13 October 1914; S. Ivor Stephen, *Neutrality? The Crucifixion of Public Opinion from the American Point of View* (Chicago: Neutrality Press, 1916), p. 130-31.
- 25 Panikos Panayi, *The Enemy in Our Midst: Germans in Britain during the First World War* (Providence, RI: Berg, 1991), p. 229; Adrian Gregory, *The Last Great War: British Society and the First World War* (Cambridge: Cambridge UP, 2008), p. 235 参照。
- 26 *Times*, 10 May 1915.
- 27 Joseph E. Persico, *Eleventh Month, Eleventh Day, Eleventh Hour: Armistice Day, 1918, World War I and Its Violent Climax* (New York: Random House, 2004), p. 91.
- 28 Gottlieb von Jagow, "German Reply to Lusitania Disaster," *America's Attitude toward the War: The President's Messages: Official Correspondence with the Entente Allies and the Central Powers, and Certain Official Papers and Speeches Bearing upon the Great War* (New York: Bankers Trust Company, 1917) pp. 39-42.
- 29 Georgina Lee, *Home Fires Burning: The Great War Diaries of Georgina Lee*, ed. Gavin Roynon (Stroud: Sutton, 2006), p. 105.
- 30 Jagow, p. 63; Brand Whitlock, *The Letters and Journal of Brand Whitlock: The Journal*, ed. Allan Nevins (New York: D. Appleton-Century, 1936), p. 140.
- 31 *The New York Times Current History: The European War*, vol. 5 (New York: New York Times, 1917), p. 431.
- 32 Parliamentary Debates, House of Lords, 5th ser. 20 October 1915, vol. 19, c. 1102. 但しかフの主張とは異なり、キャベルが処刑される以前の1915年3月と5月に、フランスはドイツ人女性のマルガレーテ・シュミットとオットイーレ・モスをスパイ容疑で処

- 刑していた。James Wilford Garner, *International Law and the World War* (London: Longmans, Green and Co., 1920), p.102.
- 33 S. S. McClure, *Obstacles to Peace* (Boston: Houghton Mifflin, 1917), p. 150.
- 34 Julian S. Corbett, *Naval Operations: History of the Great War Based on Official Documents by Direction of the Historical Section of the Committee of Imperial Defence*, vol. 2 (London: Longmans., 1921), p. 260.
- 35 Adolf Hitler, *Mein Kampf* (New York: Reynal & Hitchcock, 1939), pp. 227-42.
- 36 Troy R. E. Paddock, "German Propaganda: The Limits of Gerechtigkeit," *A Call to Arms: Propaganda, Public Opinion and Newspapers in the Great War*, ed. Troy R. E. Paddock (Westport: Praeger, 2004), pp. 115-159.
- 37 E. フェアブラザー大尉は、1914 年 10 月 19 日の日記に、ドイツ軍が盾にしているベルギー民間人を無視して攻撃するよう指令を受けたと記しており、イギリス軍も同等の行為をした可能性は高い。だがドイツがそれを非難するためには、その前提として自軍が民間人を盾にしていることを認める必要があるためプロパガンダに利用することは不可能であった。E. Fairbrother, *Private Papers*, IWM 8577 99/54/1. 6
- 38 Hitler, p. 239.
- 39 Robert Graves, *Good-Bye to All That* (1929; New York: Anchor, 1998) pp. 67, 183.
- 40 Heinrich Wandt, *Etappe Gent: Streiflichter zum Zusammenbruch* (Berlin: Freie, 1920), p. 147.
- 41 *Times*, 25 April 1921.
- 42 E. N. Bennett, "Forward," *The German Army in Belgium*, pp. x, xi.
- 43 H. C. Peterson, *Propaganda for War: The Campaign against American Neutrality, 1914-1917* (Norman, OK: U of Oklahoma P, 1939), pp. 38, 58.
- 44 Arthur Ponsonby, *Falsehood in War-Time: Containing an Assortment of Lies Circulated throughout the Nations during the Great War* (New York: E. P. Dutton, 1928), p. 161.
- 45 *Time*, 21 January 1929, p. 16.
- 46 Graves, pp. 67-68; Gregory, p. 307.
- 47 Rodney P. Carlisle, *World War I* (New York: Infobase, 2007), p. 50; Malcolm

- Chandler, *Home Front 1914-18* (Oxford: Heinemann, 2001), p. 6. チャンドラーは、「1914年8月に発行された新聞各紙」からの抜粋と記しているが、アントワープ陥落は10月10日のことである。
- 48 James Morgan Read, *Atrocity propaganda, 1914-1919* (New Haven: Yale UP, 1941), pp. 24-26. さらに、1916年6月、ドイツ支持の立場を表明していたアメリカの『ファザーランド』誌上でも、ボンソンビーを出典として連合国のプロパガンダを非難している。Fatherland, vol. 4 no. 20 (21 June 1916), p. 308.
- 49 *Vanity Fair*, 1930, vol. 34, issue 4, p. 80; Harold Lavine and James Wechsler, *War Propaganda and the United States* (New Haven: Yale UP, 1940), pp. 27-28; Charles Roetter, *Psychological Warfare* (London: Batsford, 1974), p. 13.
- 50 Harold D. Lasswell, *Propaganda Technique in the World War* (London: Kegan Paul, Trench, Trubner, 1927), p. 32.
- 51 James Truslow Adams, *The Epic of America* (1931; London: Taylor & Francis, 1935), p. 370; Ernest Dimnet, *My New World* (New York: Simon and Schuster, 1937), pp. 93-95. 以下のディムネからの引用は全てこの箇所からのものである。
- 52 ディムネが「その人物について、誰も聞いたことのない」というニコライ大佐とは、恐らくドイツ軍報道部長ヴァルター・ニコライであると思われる。戦後、ニコライは、連合国のプロパガンダを、そして国内の民主主義者やユダヤ人を執拗に非難し、ルーデンドルフやヒトラーが主張する「背後からの一突き」説を広めるのに一役買った人物である。Troy R. E. Paddock, "German Propaganda: The Limits of Gerechtigkei," Paddock, p. 152.
- 53 例えばフレデリック・ラムリーは、『アメリカの叙事詩』の初版と、『世界大戦中のプロパガンダ技術』を出典として、ドイツ人看護婦の処刑について言及している。Frederick E. Lumley, *The Propaganda Menace* (New York: Century, 1933) pp. 120-21.
- 54 Robert Jan van Pelt, *The Case for Auschwitz: Evidence from the Irving Trial* (Bloomington: Indiana UP, 2002), pp. 129-30; Gregory, pp. 42-43; Nicoletta F. Gullace, "War Crimes or Atrocity Stories? Anglo-American Narratives of Truth and Deception in the Aftermath of World War I," *Sexual Violence in Conflict Zones: From the Ancient World to the Era of Human Rights*, ed. Elizabeth D. Heineman

- (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2011), p. 119; “German Atrocities,” *Theosophical Quarterly Magazine*, vol. 35 (New York: Theosophical Society, 1938), pp. 83-85.
- 55 *Times*, 25 October 1915; *New York Times*, 25 October 1915.
- 56 Gary S. Messinger, *British Propaganda and the State in the First World War* (Manchester, Manchester UP, 1992), pp.18-19, 258; Patric. J. Quinn, *The Conning of America: The Great War and American Popular Literature* (Amsterdam: Rodolpi, 2001), p. 69; Richard Van Emden and Steve Humphries, *All Quiet on the Home Front: An Oral History of Life in Britain during the First World War* (2003; London: Headline, 2004), p. 70; Suzanne Evans, *Mothers of Heroes, Mothers of Martyrs: World War I and the Politics of Grief* (Montreal: McGill Queens UP, 2007), pp. 45, 172.
- 57 Lipkes, pp. 543-74, 9-10.
- 58 H. A. L. Fisher, *James Bryce: Viscount Bryce of Dechmont, O.M.*, vol. 2 (New York: Macmillan, 1927), p. 133.
- 59 *Report of the Committee on Alleged German Outrages*, pp. 44, 48-49.
- 60 Read, p. 187.
- 61 Ponsonby, p. 21; Zuckerman, p. 268.
- 62 Kramer, pp. 6-13; Horne and Kramer, pp. 38-42.
- 63 Ponsonby, pp. 121-25.
- 64 Ponsonby, p. 18.
- 65 *Documents on German Foreign Policy 1918-1945*, ser. D, vol. 7 (London: HMSO, 1956), p. 205.
- 66 Horne and Kramer, pp. 374, 404-05.